古王国時代の「ピラミッド都市」

——その形態をめぐって——

畑 守 泰 子^{*}

ABSTRACT Yasuko HATAMORI, *The “Pyramid City” in the Old Kingdom of Egypt*: In the Old and Middle Kingdoms, there were some settlements called niwt mr, “pyramid cities.” These “cities” were founded near the pyramid complexes in order to insure the funerary cults of the dead kings. The inhabitants worked there only for that purpose. In spite of its limited purpose, these “pyramid cities” provide us with good materials which reveals the problem, what the ancient egyptian settlements were like.

In this paper, I will look at what kind of institutions these “cities” were composed of. The following are disclosed:

(1) Certainly after the 4th Dynasty, the most pyramids had their own “cities”. But it was not until the 5th Dynasty that we can find the descriptions of the “pyramid city” on the documents.

(2) In the 6th Dynasty, the King Sneferu’s “pyramid city” had a temple, arable land, canals, lakes, and trees. The inhabitants called ḥntyw-š who served as priest and cultivator belonged to the lower classes. And the Mycerinus’ “city” possessed a kind of taxable property, and the Sahure’s possibly owned cultivated fields.

(3) Judging from the Kahun “City” in the Middle Kingdom, it seems that these “cities” in the Old Kingdom have contained such facilities as houses of personnel, storehouses, workshops, and etc.

(4) Therefore, we conclude that the “pyramid city” had their own land and some facilities. However, it is under dispute whether such settlements can be regarded as “cities”. It may well be interpreted as “domaines”.

* 東京都立大学大学院博士課程

I. はじめに

古王国時代から中王国時代にかけて、エジプトには「ピラミッド都市」niwt mr と呼ばれる居住地域がいくつか存在した。これは故王の葬祭を維持するため個々のピラミッドに付設された居住区であり、そこには葬祭を司る神官層及び生産活動に従事する農民や職人の他、役人等が定住していたと一般に理解されている。⁽¹⁾つまり「ピラミッド都市」とは、故王の葬祭維持という極めて限定された目的のために作られた人工的な居住地域ということになろう。

このように目的が限定されたものであるとは言え、「ピラミッド都市」の存在意義は決して小さなものではない。ピラミッド建設が国家を挙げての一大事業であり、葬祭儀式の継続が来世での安寧を保証する上で不可欠と見なされていたことを考慮すれば、「ピラミッド都市」も相応の重要性を持ったであろうことは容易に想像される。また、王がその保護のために公布した勅令や、高官がこれに関連する称号を持つことなどから、こうした「ピラミッド都市」の重要性を窺うことができる。⁽²⁾さらに、死せる支配者への奉仕というその目的の特殊性とは別に、「ピラミッド都市」は生者の生活と活動の場としての性格も有しており、当時の集落のあり方や人々の生活を知る上でも、貴重な手掛りとなる。⁽³⁾

こうした重要性にもかかわらず、その起源や形態、住民構成、管理支配体制及び経済構造等、「ピラミッド都市」の具体像については、いまだ不明確な部分が多い。そこで本稿では、「ピラミッド都市」の実態と社会におけるその役割を解明するための第一歩として、古王国時代の「ピラミッド都市」を中心に、その形態、即ちそれがどのような施設を含むものであったかという問題に関して考察を行なっておきたい。

なお、本論に入る前に、次の2点について断っておかねばならない。

第1に、慣例に従って nirw mr を「ピラミッド都市」と訳したが、そもそもこの niwt という語は、我々が通常用いる「都市」ないし「町」の概念と必ずしも合致するものではない。これまでにも niwt の解釈をめぐるいくつかの見解が出されているが、⁽⁴⁾まだ定訳と呼べるものはない。niwt mr についても、その実態が解明された段階で初めて適切な訳語が与えられるであろうが、現段階では一応便宜的に括弧付きで「ピラミッド都市」と訳しておくこととする。

第2に、個々の「ピラミッド都市」は、例外なくそれぞれのピラミッドと同じ名で呼ばれる。⁽⁵⁾そのため、時として niwt の付かないものも「ピラミッド都

市」⁽⁶⁾として扱われる場合がある。しかしながら、本稿では、ピラミッドそのものと「ピラミッド都市」とを厳密に区別する必要があると考え、原則的に niwt の付いた形で史料に現われるものだけを検討対象とする。

II. 「ピラミッド都市」の変遷

ピラミッドの建設は第3王朝ジュセル王治下に始まるが、第3王朝期のピラミッドには「ピラミッド都市」⁽⁷⁾が付設された形跡はない。史料上「ピラミッド都市」の存在が確認できるのは、第4王朝以降のピラミッドに限られるのである。第4王朝初代の王スネフルがメイドゥムとダハシュルに計3基のピラミッド⁽⁸⁾を建造して以来、第6王朝末までに建てられたピラミッドは20基ほどに⁽⁹⁾のぼるが、このうち「ピラミッド都市」の存在が認められるのは約半数ほどである。これら以外に「ピラミッド都市」がなかったとは断定できないが、ピラミッド全てが「ピラミッド都市」を有していたわけではなさそうである。ピラミッド自体が未完成に終わったもの、例えば第4王朝のジェドフラー王や第5王朝のネフェルフラー王の場合などは、初めから「ピラミッド都市」が存在しなかった可能性⁽¹⁰⁾が高い。

なお、第4王朝の「ピラミッド都市」が niwt の付いた形で登場するのは第5王朝以降の文献史料においてであり、それ以前（第4王朝）の史料ではいずれもピラミッド名だけが見られるにすぎない。次章で扱うスネフル王の「ピラミッド都市」も、第6王朝下にはその存在が明白に認められるものの、同王のピラミッドの建造された時代、即ち第4王朝期からその「都市」が存在したことを明確に示す史料は残っていないのである。⁽¹¹⁾

「ピラミッド都市」の存続期間はそれぞれに異なり、第5王朝のいくつかの「都市」のように王の死後間もなく衰えた⁽¹²⁾と見られるものもあれば、第6王朝末まで活動の見られるものもある。だが後者のものも、その大半は第一中間期に入ると史料が途絶えるため、衰退したと考えられている。その後中王国時代になるとピラミッド建設再開に伴い、新たな「ピラミッド都市」も再び作られるようになる。一般にカフーンの名で知られるセンウセルト2世の「ピラミッド都市」⁽¹³⁾、ヘテプ・センウセルト (Htp-Znwsrt) はその代表的なものである。⁽¹⁴⁾古王国の「ピラミッド都市」のいくつかは、この時期に再び史料に登場するようになる。⁽¹⁵⁾しかし、第2中間期初期以後ピラミッドは建造されなくなり、当然「ピラミッド都市」と呼ばれるものも作られなくなる。古王国時代の「ピラミ

ッド都市」もまた、これ以後全て姿を消す。

ところで、「ピラミッド都市」と一口に言っても、その規模や状況、及びその重要性はさまざまであり、また時代による差異もあったと推測される。一般的に王の死後時間を経るほど、その「ピラミッド都市」の重要性は低下したはずである。何か特別な理由でもない限り、直接つながりのない以前の王達の「ピラミッド都市」全てに対し、王が手厚い保護を加えたわけではないということは、早い時期に衰え以後再興されることのなかった「ピラミッド都市」の例から見ても明らかである。

これに対して、統治中の王（現王）及び先代の王の「ピラミッド都市」の場合は当然事情が異なるであろう。通例、王は存命中の完成を目ざして、即位後間もなくピラミッドを含む葬祭施設の建設を始めると言われる。第6王朝下では、これらの葬祭施設において王の存命中に既に祭儀が行なわれていたことが知られている。⁽¹⁶⁾ 第6王朝ペピ1世治下の高官ウェニは、国王の「ピラミッド都市」の副神官長 (shd hmw-ntr) に任命されているが、これは王の存命中から⁽¹⁷⁾ 「ピラミッド都市」が存在し、そこで祭儀が行なわれていたことを示す一つの例と言えよう。また、この他にも特に第5王朝末から第6王朝期にかけて、宰相をはじめとする高官が現王や前王の「ピラミッド都市」に関連した称号を持つ例が目立つようになる。⁽¹⁸⁾ こうした事態は、当時現王及び前王の「ピラミッド都市」と、そこで行なわれる王の葬祭が重要視されたことを物語っている。

III. 「ピラミッド都市」の形態

では「ピラミッド都市」とは、実際にどのような形態を持つものだったのだろうか。

初めに述べたように、「ピラミッド都市」がピラミッドでの祭儀に関連する仕事を行なう人々の居住地域であったとする点で、従来の見解は概ね一致している。しかし、そこに含まれる施設等その構成要素に関しては、各研究者の捉え方は微妙に異なると言える。

「ピラミッド都市」がピラミッド建造時の職人の居住地から発展したと見るヘルクは、この「都市」を職人や神官、役人の住居のある場所と考えた。彼はまた、建設工事中この居住区に住む職人たちは「砂漠の仕事場」 (hmwt smit)⁽¹⁹⁾ と呼ばれる場所で働いていたと述べ、居住区域と仕事場が別だったことを示唆している。

他方ユンカーは、広義の「ピラミッド都市」とは、ピラミッドに関連する建物、倉庫、役人、神官、職人、労働者の仕事場と住居等全ての施設を含むと規定した。⁽²⁰⁾ ビータックの見解もこれに近く、職人の作業場、労働者のバラック、神官や書記の家などから成り、周壁や宗教的中心（具体的には何を指すか不明）を持った複合的都市（complex town）と推定している。⁽²¹⁾ またビータックは、この「都市」に居住する行政官が、全土に散在する土地・領地を管理したとも述べており、「ピラミッド都市」が領地を有していたと捉えている。⁽²²⁾

土地所有に関して、さらに明確に言及しているのがゲーディッケである。彼は、「ピラミッド都市」が一個の機関（Institution）として固有の土地財産を持っていたと見た。⁽²³⁾ そしてこの「都市」の土地台帳に登録され、それに属したもののの中に、全国各地の王の財団（Stiftung）⁽²⁴⁾ も含まれたと見なしている。

以上の諸見解の妥当性を古王国期の史料から検討する前に、「ピラミッド都市」の形態を考える上で有用と思われる中王国期の「ピラミッド都市」ヘテプ・センウセルト（カフーン）について簡単に触れておかねばならない。⁽²⁵⁾

センウセルト2世のピラミッドのために建設されたこの「都市」は、「ピラミッド都市」としては唯一「町」らしい形の遺構が発掘されたものとして有名である。四方を厚いレンガの壁で囲まれたこの遺構群は、河岸神殿の北東に隣接して建てられていた。周壁内部は南北に走る壁で二分され、全体のおよそ $\frac{1}{3}$ を占める西半分には、職人や労働者の住居と見られる小さな家が規則正しく立ち並ぶ。一方、壁の東側では王宮ないし貴族の邸宅、或いは倉庫とも考えられる大きな建物の跡が発見されている。⁽²⁶⁾

この遺跡の状況から、「ピラミッド都市」は周壁に囲まれた住居・工房等を含む居住区と見なされてきたわけである。しかしながら、こうした形態がそのまま古王国期の「ピラミッド都市」にもあてはまり、なおかつこのような居住区だけを「ピラミッド都市」と捉えてよいものであろうか。⁽²⁷⁾

古王国期の「ピラミッド都市」周壁に関しては、その一部と見られる遺構がギザやアブシールなどの河岸神殿周辺で発見されている。⁽²⁸⁾ また、エドフやエレファンティネ等他の集落遺跡においても、この時期の周壁が見つかったところから、恐らく古王国時代の「ピラミッド都市」も何らかの周壁を有していたと考えて良いであろう。⁽²⁹⁾

では、「ピラミッド都市」が一般に周壁を持つとしても、それ以外にはどのような施設を含んでいたと見るべきであろうか。この問題に関する史料は極く

僅かしか残っていないが、その中でも最も詳しい情報を伝えているダハシュル勅令を中心に、検討して行きたい。

ダハシュル勅令は、第6王朝のペピ1世がダハシュルにあるスネフル王の2つの「ピラミッド都市」⁽³⁰⁾カア・スネフル (H^c Snfrw) のために公布した勅令である。この勅令は、当該「ピラミッド都市」⁽³¹⁾に対して種々の夫役と貢租を免除し祭儀及び住民を保護する目的で出されたものとして知られている。

「ピラミッド都市」の形態に関して、この勅令から明らかになる第一の点は、この「ピラミッド都市」が耕地を有していたということである。この事実は、以下の部分から窺い知ることができる。

(i) 「これら2つの『ピラミッド都市』に居住する人々の他は、他のいかなる『ピラミッド都市』に住むいかなる人々に対しても、〔この『都市』の〕いかなる耕地 (3ht) ⁽³²⁾も聖職禄 (w^cbt) も財産 (hrt) も与えてはならない。」

さらに、より明確に耕地がこの「都市」に属することを示す部分もある。

(ii) 「これら2つの『ピラミッド都市』のいかなる耕地も、この『都市』のケンティシュたちの他は、いかなる王妃・王子・友人・貴族の農民 (mrt) ⁽³³⁾に耕作させてはならない。」⁽³⁴⁾

(iii) 「これら2つの『ピラミッド都市』のいかなる耕地も、この『都市』のケンティシュ以外、いかなる『平和的なヌビア人』によっても、耕作や収穫がなされてはならない。」⁽³⁵⁾

(ii)(iii) いずれにおいても、「これら2つの『ピラミッド都市』の全ての耕地」(3ht nb nt niwt iptn) と表記されており、耕地がこの「都市」のものであったことは明らかである。ただ残念ながら、これらの耕地の規模やその所在地については、勅令は何も語っていない。

なお、(ii)(iii) 及びこの勅令の他の箇所にもたびたび登場するケンティシュ (hnty-š) とは、「ピラミッド都市」の所属員として耕地の耕作権を認められ、祭儀にも参加し恐らくその報酬として供物分与を受ける人々であった。⁽³⁶⁾ 彼らは、(ii) に示されるように、王族や貴族に所属する農民 (隷属的農民) ⁽³⁷⁾に匹敵する低い地位の直接生産者と考えることができる。

(i) から推測すると、ケンティシュの他にもこの「ピラミッド都市」には住民がおり、彼らもまた耕作権を持ち祭儀にも関わっていた可能性がある。とはいえ、ケンティシュ以外の住民について具体的な記述が皆無であるのに比して、ケンティシュに言及した部分が多いことを考えると、少なくともこの「都市」

の主たる所属員（住民）はケンティシュであったと理解してよいであろう。第5王朝末から第6王朝初めにかけての史料アブシール文書⁽³⁸⁾では、「葬祭殿の日々の営みを支える下級構成員⁽³⁹⁾」としてケンティシュが祭儀の補助や各種の労働に携わっていた様子が窺えるが、このようなケンティシュの性格はこの文書より数十年時代の下るダハシュル勅令公布時にも、基本的には変わっていない。

ところが、第6王朝期にこのケンティシュ称号を称する高官が多数現われるため、この時期にケンティシュ層の特権化が生じたと従来見なされてきた⁽⁴⁰⁾。こうした特権化の契機とされるのが、ダハシュル勅令やその他いくつかの勅令から知られる免税措置なのである。即ち元来ピラミッドに関連する機関の下級構成員にすぎなかったケンティシュが、貢納夫役を免除され、国家支配から半ば独立した特権階級化する。そのため、このような特権的地位を表わすケンティシュ称号を、高官たちが競って得ようとしたというのである。

しかし、ケンティシュがまだ身分の低い直接生産者としての性格を残すダハシュル勅令公布以前に、既にケンティシュ称号を持つ高官は何人も存在しており⁽⁴¹⁾、少なくともこの時期（ペピ1世治下）においては、ケンティシュ層全体が特権階級化したと捉えることはできない。従って、この段階では、まだ一般のケンティシュと高官ケンティシュを区別して考えるべきであろう。

「ピラミッド都市」の形態に関連する第二の点は、ケンティシュを含むこの「都市」の住民が祭儀を行なう場がどこにあったかという問題である。勅令には、この「ピラミッド都市」が祭儀の場、即ち神殿をも含むことを示す部分がある。

(iv) 「この『平和的なヌビア人』の下のいかなる人々も、神官の勤め (w[˙]b) を行なったり、月番の奉仕を行なったり、全ての供物を消費するために、これら2つの『ピラミッド都市』の神殿 (hwt) ⁽⁴²⁾に入ってはならない。」（傍点筆者）

この部分や (iii) に登場する「平和的なヌビア人」Nh[˙]sy-h[˙]tp とは、エジプトに定住しエジプト化した（または同化しつつあった）ヌビア人兵士を指すと言われる⁽⁴³⁾。(iv)の条項では、これらのヌビア人に仕える人々が、当該「ピラミッド都市」の祭儀に参加し、その報酬として供物分与を受けることが禁じられているのである。史料(i)から推測して、耕地の耕作同様、祭儀への参加もこの「都市」の住民に限り許可されていたのであろう。

では、ここで言及されている「神殿」(hwt [-ntr]) とは一体何を指すのであ

ろうか。耕地の場合と同じくこの神殿も「ピラミッド都市」に所属するものであることは、文脈から明らかである。この「都市」がスネフル王の「ピラミッド都市」であるため、神殿での祭儀はスネフル王に対するものが中心であろうことは十分推察できる。それに加え、勅令の末尾に「2つのピラミッド、カフ・スネフルにまします上下エジプト王スネフルに対し神官の勤めと月番の奉仕が行なわれ、神の供物が捧げられるように」この「ピラミッド都市」を保護⁽⁴⁴⁾（または免除⁽⁴⁵⁾）する旨が明記されているところから見て、祭儀の対象はスネフル王と特定しうる。そうであるとすれば、この神殿とは当然本来の葬祭儀式の場、即ちピラミッド付属神殿を指すと考えてよからう。通常、葬祭儀式は付属神殿のうちでもピラミッドに隣接した葬祭殿で行なわれるため、この神殿も葬祭殿を指すのではないかと考えられる⁽⁴⁶⁾。

第三に、ダハシュル勅令の主題とも言うべき貢納夫役免除に関連して、「ピラミッド都市」の形態とも関わる次のような記述も残されている。

「これら2つの『ピラミッド都市』において、水路 (mrw)、池 (šw)、井戸 (šdwt)、草袋 (hnwt)、いちじくの木々を〔課税のため〕査定してはならない。」⁽⁴⁷⁾

ここから、水路や池、木に至るまでこの「ピラミッド都市」に含まれていたことが判る。水路や池が課税対象であったことを示す史料は他になく詳細は不明だが、木についてはグレコ＝ローマン期に類例があるという⁽⁴⁸⁾。課税の対象とされるからには、1、2本の木ではなくある程度数が植えられた果樹園のようなものを指すのかも知れない。

この他、勅令には触れられていないが、この「ピラミッド都市」にも当然のことながら住民の居住地も存在したであろう。ただ、カフーンのように王宮や高官の邸宅が当時のこの「ピラミッド都市」にあったかどうかは疑問である。カフーンの「ピラミッド都市」の活動期間はせいぜい100年ほどの間であり、しかもこれはセンウセルト3世とアメンエムヘト3世のピラミッド建設、及びファイユームの灌漑事業にも用いられたための存続と見なされているからである⁽⁴⁹⁾。これに対し、この「都市」の場合、勅令公布時には王の死後既に約300年が経過している。このような「ピラミッド都市」に、王や高官がたとえ一時的にせよ居住したとは考え難い。

以上の点から、ダハシュル勅令公布当時（第6王朝前半）のスネフル王の「ピラミッド都市」は、所属員の居住地区——そこに工房や倉庫も存在した可能性は十分あろう——の他、耕地や果樹を植えた土地、水路・池・井戸等の諸

施設、さらに神殿をも含むものであったことが判る。このうち、ピラミッドに関連する建造物が一般に砂漠に建てられていた点を考慮すれば、耕地や果樹園は居住区を囲む周壁内部にではなく外側にあったと見るのが自然であろう。また神殿にしても、これが葬祭殿であるとすれば（仮に河岸神殿であるとしても同様に）、カフーンの例から類推して、居住区域の外側にあったと考えられよう。

ダハシュル勅令の他に、第5王朝のサフラー王の葬祭殿址で発見された碑文断片にも、「ピラミッド都市」の語が見い出せるものがある⁽⁵⁰⁾。この碑文は、文字の様式から第6王朝期の勅令断片と考えられているが、ここにも「耕地」(shṭ) という文字が刻まれている。極めて断片的な碑文であるため、この耕地と「ピラミッド都市」の関係は明らかではない。とはいえ、発見者のボルハルトは、文脈から見てこの耕地がラー神等の神殿のものである可能性を否定しており⁽⁵¹⁾、耕地がサフラー王の「ピラミッド都市」に属す可能性は十分あると言える。

またさらに、ダハシュル勅令と同様、「ピラミッド都市」に対して公布されたメンカウラー勅令からは、メンカウラー王の「ピラミッド都市」ネチュル・メンカウラー (Ntr-Mnk3wr^r) が何らかの財産 (ht) を有していたことが窺える⁽⁵²⁾。この勅令は、ダハシュル勅令より少し時代の下る第6王朝ペピ2世治下に、同王がメンカウラー王（第4王朝）の祭儀保護のため発布した免除勅令であるが、欠損が多く他の施設や耕地の存在、免除の内容等に関して詳細は不明である。

IV. むすびにかえて

これまでの検討の結果、次のことが明らかとなった。即ち、第6王朝期において、スネフル王の「ピラミッド都市」が耕地及び神殿、水路等の諸施設を備えており、メンカウラー王の「都市」も少なくとも徴税の対象となるような何らかの財産を有していたと見られる。また、サフラー王の「都市」にも耕地が存在した可能性があると考えられる。

では「ピラミッド都市」のこうした状況を、古王国期の社会の中でどのように位置づけるべきであろうか。この問題に答えるためには、なおいくつかの点に関する考察が必要となる。

まず、このような形態が、この時代ないしは当該諸「ピラミッド都市」に特有のものであったのか、或いは一般的な形態であったのかという疑問が生じる。

史料に見られるこれら3つの「ピラミッド都市」はいずれもその本来の所有者の時代からはるかに後の時代の姿であり、必ずしも元来の形態をそのまま留めているとは限らない。第5王朝末から第6王朝にかけて、歴代の王は以前の王たちの祭儀と「ピラミッド都市」の復興を試みたと言われている⁽⁵³⁾。しかし、それが既に衰退し原型を留めていなかったものを再興したのか、或いは連続と存続していたものに対する保護強化と見るべきか、または完全な新設であったのかによって、この復興政策の意義は異なって来るであろう。特に、同時代史料のない第4王朝の「ピラミッド都市」については、第3の可能性も十分存在するのではなかろうか。⁽⁵⁴⁾ シュタデルマンは、ギザにおいて *niwt mr* が現われる以前に、*grgt* や *tniw* と呼ばれる集落があり、後にこれらが *niwt mr* として包括されたと述べているが、⁽⁵⁵⁾ この事実は第4王朝下にはまだ「ピラミッド都市」と呼ばれる居住地域が存在していなかったことを示唆するものとも考えられる。但し、それが単なる名称の違いにすぎないのか、或いは実態変化を伴うものであるのかという点も考慮しなくてはならない。

第2の問題点は、ダハシュル勅令に見られるような「ピラミッド都市」を、どう解釈すべきかという点である。つまり、集落である「ピラミッド都市」が、一個の機関として土地や神殿を有していたと見るべきか、もしくは土地や神殿等を含めたもの全体が「ピラミッド都市」と呼ばれていたのか、という問題である。前者の場合には、規模や機能の面から疑問は残るにせよ、一般的な古代・中世の「都市」「町」のイメージとさほどかけ離れたものではない。ところが後者の場合には、むしろ全体がピラミッド祭儀のために設立された所領のようなものと捉えられる。この場合、「ピラミッド都市」とは、いくつもあるピラミッド領地の一種と考えるべきであろう。

以上の諸点に関しては、今後さらに所属員や管理支配体制等の側面から「ピラミッド都市」の検討を行なった上で、再び立ち返り結論を出したいと考えている。

略 語 表

CdE: *Chronique d'Égypte*, Bruxelles.

JA: *Journal Asiatique*, Paris.

LÄ: *Lexikon der Ägyptologie*, Wiesbaden.

MDIK: *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts*, Abteilung Kairo, Wiesbaden.

RdE: *Revue d'Égyptologie*, Paris.

注

- (1) *LÄ*, V, 9–14; W. Helck, “Bemerkungen zu den Pyramidenstädten im Alten Reich,” *MDIK*, 15, 1957, S. 91 (以下 *Bemerkungen* と略記); idem, *Untersuchungen zu Beamtentiteln des ägyptischen Alten Reiches*, Glückstadt, 1954, S. 129 (以下 *Untersuchungen* と略記); M. Bietak, “Urban Archaeology and the ‘Town Problem’ in Ancient Egypt,” in K. R. Weeks(ed.), *Egyptology and the Social Sciences*, Cairo, 1979, pp. 114–115, 129–130. 等。
- (2) *Urk.* I, 209–213 (ダハシュル勅令); *Ibid.*, 277–278, (メンカウラー勅令)。
- (3) 特に第5王朝後半以降, 「ピラミッド都市」長官や神官等の称号を持つ高官貴族が多数存在した。cf. Helck, *Bemerkungen*, S. 94–95.
- (4) 古王国時代の居住地域を表わす代表的な語には *hwt* と *niwt* がある。*hwt* が王の行政の中心地, 或いは王の行政により統轄された地域と見られているのに対し, *niwt* に関しては, *hwt* をも含む全ての居住地を示すとする見解 (M. Atzler, “Einige Bemerkungen zu und im Alten Ägypten,” *CdE*, Vol. 47, 1972, pp. 17–44. なおこの見解については Bietak, op. cit., pp. 98–99, 及び吉成薫「古代エジプトの都市」, 『オリエント』第28巻第2号, 1985年, 177頁も参考となる), や自然発生的村落ないし王家や貴族の創設した “domaine” とする見解 (H. K. Jacquet-Gordon, *Les Noms des domaines funéraires sous l’ancien empire égyptien*, Le Caire, 1962, pp. 3–10.) 等がある。
- (5) 「ピラミッド都市」の名は, ピラミッド名の後ろに *niwt* を付けた形で書き表わされる。
- (6) 例えば, Helck, *Bemerkungen*, passim.
- (7) *LÄ*, V, 9; R. Stadelmann, “La Ville de la pyramide à l’Ancien Empire,” *RdE*, 33, 1981, p. 67.
- (8) メイドゥムのピラミッドについては, 第3王朝末の王フニのものとする説もある。但し, その名前 (*Dd-Snfrw*) はスネフル王に因んだものである。
- (9) このうち発掘によってある程度状況が分るのは, ギザのメンカウラー王のものくらいで, 他は勅令や貴族の墓碑などの文献史料からその存在が知られるにすぎない。
- (10) Helck, *Bemerkungen*, S. 107, 109.
- (11) いずれも役人の称号の中で, *niwt* の付かない形で登場するだけである。cf. A. Fakhry, *The Monuments of Sneferu at Dahshur*, Vol. II, Part II, Cairo, 1961, pp. 4–7 (Nfr-*prf*); H. Junker, *Giza VI*, Wien, 1943, S. 19 (K3i-nfr)
- (12) 例えば, メンカウホル, イセシ各王の「ピラミッド都市」。
- (13) 例として, ペピ1世の「ピラミッド都市」*Mnnfr-Mryr* 等を挙げることができる。Helck, *Bemerkungen*, S. 110.
- (14) IIIを参照。
- (15) Helck, *Ibid.*, S. 106–107.

- (16) その一例として、ペピ2世がミン神殿と関連して、自らの像を祭る施設 *pr-šn'* を創設し、そこで祭儀を行なわせていたことが挙げられる。Urk. I, 293-295 (コプトス G 勅令), *Ibid.*, 289-293. (コプトス D 勅令)。
- (17) *Ibid.*, 98, 16.
- (18) 第5王朝末イセシ王下からウニス王下の宰相 *3ḥt-ḥtp* と、その息子で同じく宰相であった *Pḥt-ḥtp* II は、共にニウセルラー、メンカウホル、イセシ3王の「ピラミッド都市」長官、副士官長の称号を持っていた。また第6王朝のテティ王下の宰相 *K3i-gmni* はテティ王の、ペピ2世下の宰相 *Tū* はペピ1世と2世のそれぞれ「ピラミッド都市」長官職に就いていた。他にもこうした「ピラミッド都市」長官や神官に関連する称号を持つ高官が何人か知られている。N. Strudwick, *The Administration of Egypt in the Old Kingdom*, London, 1985, pp. 55-170. 「ピラミッド都市」の管理責任者である長官 (*imy-r niwt mr*) の変遷については, Helck, *Bemerkungen*, S. 94-95 を参照。
- (19) *Ibid.*, S. 91; *idem*, *Untersuchungen*, S. 129. なお, シュタデルマンは, 「ピラミッド都市」は職人らの居住地から発展したものではなく, 河岸神殿と結合し発達したと主張し, ヘルクの説を否定している。LÄ, V, 9; Stadelmann, *op. cit.*, pp. 67-68.
- (20) Junker, *op. cit.*, S. 19. ユンカーによれば, 狭義の「ピラミッド都市」とは王のピラミッドとその周辺のマスタバ群を指すという。
- (21) Bietak, *op. cit.*, pp. 114-115.
- (22) *Ibid.*, p. 130.
- (23) H. Goedicke, *Königliche Dokumente aus dem Alten Reich*, Wiesbaden, 1967, S. 240.
- (24) 土地を持つ一種の組織を意味する。
- (25) カフーンについては, 以下の文献に依った。W. M. F. Petrie, *Illahun, Kahun and Gurob 1889-90*, London, 1891; R. David, *The Pyramid Builders of Ancient Egypt, A Modern Investigation of Pharaoh's Workforce*, London, 1986, pp. 101-113; LÄ, III, Wiesbaden, 1980, 910-911.
- (26) 発掘されたのは三方の壁のみ。その規模は約 $350 \times 400\text{m}^2$ 。
- (27) 河岸神殿は, ピラミッド複合体の一構成要素であり, 増水時に河岸となる場所に建てられていた。王の遺体や葬祭用品, 供物等はまずこの神殿に運ばれ, ここからさらにピラミッドに隣接する葬祭殿へと送られると言う。David, *op. cit.*, pp. 43-44.
- (28) LÄ, V, 10-11.
- (29) Bietak, *op. cit.*, pp. 105-114.
- (30) 単数形の *niwt* の後にピラミッドの決定詞が2つ書かれている。ダハシュルのスネフル王の2つのピラミッド(いわゆる「赤いピラミッド」と「屈折ピラミッド」)に関連することはほぼ確実だが, 「町」自体が2つあったのか, 1つしかなかったのかという点で見解は分かれている。前者については, Stadelmann, *op. cit.*, p. 69; Helck, *Bemerkungen*, S. 106-107 後者としては, Goedicke, *op. cit.*, S. 59 等が挙げられる。現状ではどちらが妥当か断定できないが, 勅令の文面から見て, 前者の場合にも行政的には2つの「町」が一体として扱われていたと考えられる。
- (31) Urk. I, 209-213.

- (32) *Ibid.*, 213, 1-4.
- (33) 称号の一種 (smr)。
- (34) *Ibid.*, 210, 13-17.
- (35) *Ibid.*, 211, 1-4.
- (36) ケンティシュに関しては, Helck, *Bemerkungen*, S. 98, 102-103; idem, *Untersuchungen*, S. 107-109; Junker, *op. cit.*, S. 15-19; 屋形禎亮「ケンティシュについて」『三笠宮殿下遷厝記念オリエント学論集』講談社, 1975年, 330-336頁, 等を参照。
- (37) この「ピラミッド都市」のケンティシュが比較的低い地位にあったことを示唆する, 次のような部分もダハシュル勅令中に存在する。「彼ら (=ケンティシュ) の土地台帳の場へ来た (登録された?) か, また [将来] 来るであろうこれら 2 つの『ピラミッド都市』のいかなるケンティシュも, [かつて] その下にいた (=属した) いかなるエジプト人や『平和的なヌビア人』によっても連れ去られてはならぬと余 (=王) は命じた。彼ら (=ケンティシュ) に対して, 彼ら (=エジプト人とヌビア人) は請求権を持たない。」(*Urk.* I, 211, 5-11) ここから, この「ピラミッド都市」のケンティシュが以前は他のエジプト人やヌビア人に従属していたことが窺える。
- (38) アブシール文書は, ピラミッドに関連するケンティシュの存在を示す最古の (第 5 王朝末), かつ古王国期の史料としてはダハシュル勅令以外唯一のまとまった史料である。同文書については, 屋形禎亮「アブシール文書研究(一)」, 東京教育大学文学部紀要『史学研究』第96号, 1974年, 40-41頁, 「アブシール文書研究(二)」, 同『史学研究』第101号, 1975年, 1-16頁, 等を参照。
- (39) 屋形, 前掲「ケンティシュについて」334-335頁。
- (40) Junker, *op. cit.*, S. 15-19; Helck, *Bemerkungen*, S. 102-103; idem, *Untersuchungen*, S. 107-109; idem, *Wirtschaftsgeschichte des alten Ägypten im 3 und 2 Jahrtausend vor Chr.*, Leiden, 1975, S. 142-143 (以下 *Wirtschaft* と略記); Goedicke, *op. cit.*, S. 60, 74-77, 240.
- (41) テティ王下の宰相 'nh-m^c-hr/Zzi や Nfr-sšm-r^c/Ssi, ペピ 1 世下の宰相 T₁tw 等。N. Kanawati, *The Egyptian Administration in the Old Kingdom*, Warminster, 1977, pp. 87-88, 103-104, 127-128. ヘルクは, この他にもこの時期にケンティシュ称号を持っていた多数の高官を挙げている。Helck, *Bemerkungen*, S. 103.
- (42) *Urk.* I, 212, 9-13.
- (43) 内田杉彦「ヌビアにおける imy-r i^c3ww」『オリエント』第26巻第1号, 1983年, 4-5頁。
- (44) hwt.
- (45) *Urk.* I, 213, 8-12.
- (46) David, *op. cit.*, p. 44. 但し, 「ピラミッド都市」がもう一つのピラミッド付属神殿である河岸神殿の近くに建設された場合が多いところから, 祭儀の中心はこうした河岸神殿であったとする見解もある (Stadelmann, *op. cit.*, p. 68.)。このシュタデルマンの説は, 注(19)に記したように「ピラミッド都市」の起源と密接に関わるため, 今後この起源の問題を論じる際に詳しく検討したいと考えている。ただ, スネフル王の「ピラミッド都市」の場合, ここで扱った時代は建造時よりはるか後代であり, 葬

祭殿と河岸神殿どちらが祭儀の中心であったにせよ、これが当初から続いた姿であったとは言い切れない。時代を経るにつれて祭儀の規模が縮小し祭儀の場も変わることもありうるからである。

- (47) *Urk.* I, 212, 5–6. なお、ここで水路、池、井戸、革袋と訳した語については、それぞれ放牧地、土地の一種、家畜(2種類)とする解釈もある。M. A. Moret, “Chartes d’immunité dans l’Ancien Empire égyptien,” *J. A.* ser. X, t. 20, 1912, pp. 404–407; J. Pirenne, *Histoire institution et du droit privé de l’ancien Égypt*, Vol. II, Bruxelles, 1935, pp. 255–256.
- (48) Moret, *op. cit.*, p. 405.
- (49) David, *op. cit.*, pp. 112–114.
- (50) L. Borchardt, *Das Grabdenkmal des König S^cA3HU-RE^c*, Bd. I, Osnabruck, 1982 (1st pub., Leipzig, 1910), S. 100.
- (51) *Ibid.*
- (52) *Urk.* I, 277–278.
- (53) Borchardt, *op. cit.*, S. 100; Goedicke, *op. cit.*, S. 237; Helck, *Wirtschaft*, S. 45–46.
- (54) 注(37)に挙げた史料は、第1ないし第3の可能性を示唆するものと考えられる。というのは、通例世襲であるはずのケンティシュが新たに徴募されたという事態は、既に衰微していた祭儀がダハシュル勅令公布時からさほど遠くない時代(徴募がまだ人々の記憶に残っていた時代)に復興(または新設)されたことを暗示しているからである。
- (55) Stadelmann, *op. cit.*, p. 69.